



2014.5.1

5月ちとせだより

神戸YMCAちとせ幼稚園

新年度が開始され2ヶ月目を迎えています。子どもたちは、YMCAの幼稚園をどのように感じているでしょうか。子どもには、幼稚園という先立つ概念はありません。初めて出会った幼稚園で、「先生の言うことをよく聞いて下さい。勝手なことはしてはいけません。」と言われるのであれば、子どもたちは先生の指示を注意して聞き、「次はこれをしなさい。こうしなさい」と言われることに対して、「先生、出来ました。これで良いですか。」といったように、与えられた課題に対して答えるといった環境として幼稚園を理解するでしょう。そこでの活動は自分の意思で選んだものではなく、与えられた課題にどれほど忠実に答えられるかが評価基準となり、子どもたちはより高い評価を求めて活動することとなります。しかし、それが本来の子どもの仕事である「遊び」からは、ほど遠いものであることは明らかです。

本当の意味での「子どもの仕事である遊び」は、自らの興味関心を原動力として、自分自身で考えてその遊びを広げていくことが出来るものです。そして興味関心があるからこそ、少しぐらい上手いかななくてもそのことを楽しみますし、また更に工夫して何度もチャレンジしますし、そんな遊びをきっかけにして他の子どもへの関わりも広がっていくものなのです。そして何よりも、遊びに対しては誰かからの評価を求める必要はなく、自分自身が納得できたか、満足できたかどうか子どもにとっては大切なことです。もちろんここでいう遊びは、ゲーム機器などの遊び方が限定された遊びではなく、決められた使用方法やルールなどが少なく、自ら工夫して遊びを広げていくことが出来る遊びなのですが、そういった認識はもはや当たり前ではなくなっているのかも知れません。

また、大人が子どもに対して、「これも出来るようにしよう」「これもさせてみよう」と大人の発想で与えるものが多ければ多いほど、子ども自らが遊びだそうとする意欲もチャンスも減じられていきますし、子どもたちは常に評価される側に立っている不安を感じている中で生きていくこととなります。誰かの評価を気にすることなく、自分自身に相対して納得できるまでやり通す経験とその実感を味わうことが出来るのも、子どもにとっては遊びという経験を通してなのです。

最近の若者の課題として、「自ら考えて判断できず、指示されなければ動けない」といったことがよく聞かれ、学校教育においても「生きる力を育む」ことが重要とされています。しかし、幼少年期から大人の価値観で課題が与えられてばかりいて、また毎日の予定がスケジュール化された中で、細切れの時間だけが子どもに与えられた自由な時間というのでは、子どもの生活は受身のものとなり、自らの意思で選り動き出すことが出来る力が身につかなくても当然ではないでしょうか。しっかりと遊んで伸ばされる力こそ幼少期に身につけるべき力であり、将来にわたる生きる力を築いていくものなのです。

子どもたちにとっての「遊ぶ意欲」は、「生きる意欲」であり、そこから生まれる「生きる喜び」なくしては、「生きる力」は身につかないことを忘れることなく、子どもたちの遊びを見守っていきたいと思います。

年主題 「あふれる愛 - これからもともに - 」

<年主題聖句> 「わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

(創世記 28 章 15 節後半)

5月主題 「感じる」

聖句 “主は倒れようとする人をひとりひとり支え、
うずくまっている人を起こしてくださいます。”

(詩篇 145 篇 14 節)